

が、この亀裂は『テイマイオス』の結論部分で覆い隠されたことを読み取った。

「場所」は、エドワード・ケーシーによると、西洋哲学・形而上学において長く忘れられ、眠り込まれるままになっていた。それは、中世の間に場所が空間に敗北したためであるという。アリストテレス以来の場所と空間の勢力争いに決着がついたというわけであるが、ケーシーが勝ったとする空間はプラトンによって提起され、そして、デリダが注目したコーラではない。コーラもまた眠っていたのだ。アリストテレスは『自然学』の中に、「場所」を存在の第一のものとして置いた。そして「コーラ」は「空間」に棚上げされてしまい、「場所」復権の現代、コーラを引きながらもトポスに基礎を置いて、第三のものとなづけられることなく語られることになった。

第三のものはプラトンが語ったように第一のものと第二のものとを結びつける。この対立する二項——たとえば、敵と味方、強者と弱者、支配する者と支配される者——の解として、コーラが考えられるのではない。デリダは、「コーラについての言説は、類 (genos) というものについての、そしてさまざまな種類のジャンルについての言説でもある」と言う。「コーラ」、「場」を考えることは、類 (le genre) について、対立するジャンルのある世界を思い描くことである。私たちがコーラ(場) Ⅱ第三のものを思考するとき、人の生活の場への到来、居住についての問いを誘発する。息詰まるような二項のみの在り方から、第三者のあることによる、第三者に限定しない自由と多様性への広がりも視野に入る。

L・シュトラウスによる

F・ローゼンツヴァイク批判の射程

佐藤 貴史

近年、レオ・シュトラウスの思想はわが国においても積極的に論じられるようになったが、そのきっかけの一つとして、彼を前アメリカ大統領の「知的ゴット・ファーザー」とみなす傾向をあげることができよう。

しかし、本発表の目的は、シュトラウスの思想と現実政治との関係ではない。そうではなく、ヴァイマル時代のシュトラウスと彼に大きな影響を与えたフランツ・ローゼンツヴァイクの関係、とくにシュトラウスによるローゼンツヴァイク批判の内実とその射程を測定することで、シュトラウス自身の問題意識の一端を明らかにすることである。

シュトラウスにとつてローゼンツヴァイクは、二〇世紀初頭のドイツにおけるカール・バルトとならぶ「神学復興」の立役者の一人であった。しかし、シュトラウスにとつてローゼンツヴァイクによる「聖書の啓示への無条件の回帰」は「無条件の回帰」と呼べるものではなかった。曰く、「彼が回帰したユダヤ教は、モーゼス・メンデルスゾーン以前のユダヤ教とは同一のものではなかった」。ローゼンツヴァイクの「新しい思考」は、「新しい」といいながらも、結局のところ「古い思考」に囚われていたのである。シュトラウスは、そのしるしをローゼンツ

第3部会

ヴァイクの新しい思考としての「経験する哲学」に見出す。

シュトラウスによれば、「新しい思考は、現在の信仰者によって経験されたこと、あるいは少なくとも経験されることが可能なことと、伝統によって単に知られるだけのこととのあいだの差異に、情熱的に関心をむける」。「経験する哲学」はその名の通り、「経験されることからいつでも出発」するが、「経験の経験されざる『前提条件』からは出発しない」のである。「経験の経験されざる『前提条件』あるいは「ユダヤ人の意識にとつて第一義的であり権威あること」とは何か。それは、あらゆるものに先立つ「神の律法であるトーラー」であった。しかし、彼にとつて結局のところ、ローゼンツヴァイクの啓示論は律法を真剣に受け取ることなく、神と人間の結合点を現在の信仰者の経験と意識に求めたのである。

さらにシュトラウスの目からみれば、ローゼンツヴァイクによる聖書の啓示への回帰は「近代哲学」すなわち「啓蒙主義」の影響の下でなされたものであった。ローゼンツヴァイクもまた、次のようなユダヤ人の一人にすぎなかつたのである。「伝統に回帰するこれら現代のユダヤ人たちは、伝統のなかで無意識的ないし素朴になされていたことを、反省の地平で行おうとする。彼らの態度は、伝統的というよりはむしろ歴史的なものである。彼らは過去の思想を過去の思想として、それゆえ現在の世代を必ずしもそのままで拘束するのではないものとして研究する」。こうして二〇世紀の回帰運動は、根本から見直されなければならなくなつた。すなわち、シュトラウスによるローゼンツヴァイク批判の射程は単に彼の新しい思考や当時のユダ

ヤ人思想家にのみならず、当時のユダヤ教およびヨーロッパ思想がその背後に隠しもつていた近代理解の不徹底性にまで及んでいたのである。

シュトラウスは、「スピノザの宗教批判」(英語版への序言)のなかで次のように書いた。「本研究は、近代以前の哲学への回帰は不可能であるという、強力な偏見によって認可された前提に基づいていた」。「強力な偏見」からローゼンツヴァイクもまた逃れることはできなかった、というのがシュトラウスの結論であろう。しかし、それ以上に彼のローゼンツヴァイク批判は「啓蒙主義と正統派の古典的論争」の「取り戻し/再理解」をも、その射程におさめていたのである。

『論理哲学論考』の

「文番号七」の原形と新解釈

星川啓慈

ワイトゲンシュタインの『論理哲学論考』(『論考』)における「人は、語りえないものについては、沈黙しなければならぬ」という文番号七を、『原論考』(『原論考』以前のもの)にまで遡り、その原形を確認すると、それはもともと「価値」(神・信仰・宗教・倫理)との関わりで書かれた可能性が高い。『論考』出版後は、最初「自戒」であつた文番号七が「公言」となつて彼に付きまとい、彼の「神や信仰や宗教について語り